

原 著

基礎教育と実習施設との連携による教育効果 (第2報)

Educational Effects of Cooperation Between Nursing School and the Field of Clinical Practice (The Second report)

平井 純子 吉越 洋枝 前山 直美

Jyunko HIRAI, Hiroe YOSHIKOSHI, Naomi MAEYAMA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：実習病院臨床指導者 連携教育 実習指導 教育効果 学生 演習 授業参観

はじめに

平成23年3月厚生労働省「看護教育の内容に関する検討報告書」によると、学生の实践能力向上のための教育体制として教員と実習指導者の役割分担と連携が重要と明記している¹⁾。また、近年、実習施設と基礎教育機関が力を合わせて看護基礎教育の質向上を目的とするユニフィケーションシステムが導入されている。神奈川県では、平成15年より看護実践教育の質の向上を目的にユニフィケーションシステムが立ち上がり実践活動を行っている^{2) 3)}。本学科では、平成24年度より主たる実習病院であるY病院（以下病院）の臨床指導者や教育担当者を学内演習に招き、学生のレディネス把握を兼ねながら実習指導に活かすための活動を開始している。本学とY病院の連携教育の目的は、基礎教育と卒後教育との更なる連携を図ることを主なねらいとし、看護実践研修及び教育実践を共に企画・試行していくことを通し、教職員の相互研鑽及びより効果的な臨地実習指導や基礎教育の実践を目指すことである。

平成24年度第1回授業参観を通して、連携教育における学生と指導者両者の効果を「第1報」として報告した。指導者は、授業参観により学生の学習環境や学習習得状況などのレディネスを把握し、実習でみる緊張した学生と学内演習時の異なる姿などから、学生への理解が深まり、実習指導に活かせることがわかった。

学生は、指導者から術後1日目の患者の観察内容・援助方法等について、具体的な指導を受けたことにより、授業で学んだ知識を看護技術に繋げる事ができた。また、教員と指導者は、事前打ち合わせや終了後の授業参観評価会を通して、学生状況を共有し相互に研鑽しながら実習指導に活かす事ができた事を確認した。以上から、指

導者による授業参観は、基礎教育との連携教育に有効であることが示唆された。

今回は、同じく看護学科2年生対象の成人看護学演習「術後1日目の離床への援助」の授業参観に6名の指導者が参加した。成人看護学実習Iを1週間後に控えた学生が、臨床指導者に、直接、指導を受けた演習の教育効果を分析したところ演習目標の達成とともに実習や学習への動機づけ、今後の課題を見出すなどの教育効果と今後の方向性に示唆が得られたため「第2報」として報告する。

I 研究方法

1. 対象：成人看護学演習を受講した本学2年生81名、授業参観した指導者6名
2. 期間：平成27年1月17日～11月30日
3. 調査方法：演習終了後に、独自に作成した質問紙調査票を学生に配布し、3日間留め置いた後、研究室前に提出ボックスを設置し回収した。指導者に対しては、演習終了後に配布し、当日回収した。
4. 調査内容
無記名自記式質問紙法を用いた。質問項目は、学生には、①指導者から受けた指導項目、②指導内容、③参考になった指導内容、④イメージ通りに報告できたか、⑤指導者から適切と評価を受けた内容、⑥演習をとおして今後の課題となったことは何か、⑦演習全体を振り返っての感想の7項目に設定し、指導者には、①学生の演習状況から指導が必要だった技術と②指導を通して気づいたことの2項目に設定した。回答方式は、学生に対する質問項目①～④、指導者に対する質問項目①は選択式、

受付日 2015年11月30日

受理 2016年1月28日

学生に対する質問項目⑤～⑦と指導者に対する質問項目②は自由記載とした。

5. 分析方法

学生に対する質問項目①～⑥は単純集計とした。質問項目⑦および指導者に対する質問項目は記述内容をコード化し、その後カテゴリー化した。

6. 倫理的配慮

学生へは、アンケート用紙に調査目的及びその結果は目的外に使用しないこと、また成績に関与しないことを記載した。アンケート用紙配布時に、その旨の説明をし、同意を得た。指導者へはアンケート用紙への記載と配布時に説明するとともに、連携教育実施前後に、これらの取り組みを研究的にまとめることを提案し全員の同意のもとに進めた。アンケートは無記名とし、回収は、研究室入口に留め置き法とし個人が特定されないことを説明した。さらに、アンケートへの協力は任意であること、回答はプライバシーを守り、データは調査者の責任で厳重に保管することを説明した。

II 結果

質問紙の回収数は、学生が71部（回収率87.7%）、指導者が6部（100%）であった。質問別にすべての項目に回答のあった質問紙を分析対象とした。

1. 成人看護学演習の概要

急性期看護過程演習授業で展開した「胃切除術後患者」を受け持ち患者と想定し、「術後1日目の離床への援助」を演習テーマとした。第1回授業参観は90分（1限）であったが、25年度からは180分（1・2限）授業とし、A・Bクラス毎に同日実施した。

演習内容は、①受け持ち学生は担当教員や指導者に看護計画を報告、②観察結果から寝衣交換や離床が可能かどうかをアセスメントし報告、③離床援助か寝衣交換のいずれかを実施する流れとした。①を90分、②③を90分で実施し、患者役は学生間で行き可能な限り術後1日目患者がイメージできるように点滴、ドレーン、模擬創、腹帯、T字帯など装備した。

演習は、1グループ4～5名とし10グループ編成で実施した。指導者は、担当グループの実施中の助言、実施後の報告まで直接指導を担当した。1・2限は4名の指導者が1グループずつ4グループを、3・4限は3名の指導者が1グループずつ3グループを担当した。教員は他のグループを5名で担当し実施場面を直接指導した。学生へは、①演習ガイダンスの際に臨床指導者の演習参観があること、②授業参観は大学と病院が連携して学生へ効果的な教育を目指す試みであることと、学生を理解

して実習指導に活かす連携教育の一環であることを説明した。演習終了後、各指導者から全学生に対して、演習全体についての助言をいただいた。

指導者への事前打ち合わせとして、演習計画・演習に関連した授業、学生の科目履修状況に関する資料、学生指導の視点として各援助技術のチェックリストを配布した。また、演習開始前に演習の流れや学生の状況などについてオリエンテーションを実施した。

2. 学生のアンケート結果

1) 学生が指導者から受けた指導項目

学生に、演習中に指導者から指導を受けた項目について複数選択式で回答を求めた。半分以上の項目で指導を受けたと回答した学生が71名中46名（64.8%）であり、2～3項目の指導を受けた学生は25名（35.2%）だった。項目別では、「術後の観察」97.2%、「点滴中の寝衣交換」80.3%、「離床への援助」76.1%の割合が高く、「患者役への説明」47.9%の割合が低かった。（表1）

表1 学生が指導者から受けた指導項目

指導項目	回答数	割合
術後の観察	69	97.2%
点滴中の寝衣交換	57	80.3%
離床への援助方法	54	76.1%
患者役への説明	34	47.9%
その他	5	7.0%

2) 演習中に受けた指導内容

演習中に受けた指導内容について複数選択式で回答を求めた。「寝衣交換の手順（健側、患側）方法」87.3%の割合が最も高く、「腹腔ドレーンなど胃切術後に特有な観察方法」77.5%、「呼吸音・腸蠕動音などのフィジカルアセスメント」70.4%の割合も高かった。「バイタルサイン測定」40.8%の割合が最も低かった（表2）。

表2 演習中に受けた指導内容

指導項目	回答数	割合
寝衣交換の手順(健側、患側)方法	62	87.3%
腹腔ドレーンなど胃切術後に特有な観察方法	55	77.5%
呼吸音・腸蠕動音などのフィジカルアセスメント	50	70.4%
一般状態等の観察の方法	48	67.6%
離床への援助方法	47	66.2%
離床時の安全確認	43	60.6%
バイタルサイン測定	29	40.8%
その他	3	4.2%

3) 受けた指導内容の中で特に参考になった指導内容

2)の演習中に受けた指導内容の中で特に参考になった指導内容について、短答式で回答を求めた。「腹腔ドレーンなど胃切術後に特有な観察方法」31%、「寝衣交換の手順（健側、患側）方法」21.1%、「呼吸音・腸蠕動音などのフィジカルアセスメント」18.3%の割合が高く、「離床時の安全確認」4.2%、「バイタルサイン測定」2.8%の割合が低かった。（図1）

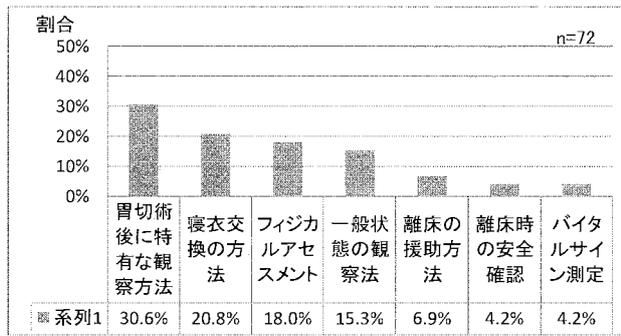


図1 特に参考になった指導内容

4) イメージどおり報告できたか

観察した内容をイメージどおり報告できたかについて、『はい』、『いいえ』に2分類し、『いいえ』と回答した理由について、短答式で回答を求めた。『はい』と回答した学生は14.1%、『いいえ』は85.9%であった。『いいえ』と回答した理由で最も多かったのは「アセスメントが不足していた」56.5%であった。次いで、「観察項目が不足していた」17.7%、「正確に報告できなかった」13.1%であった。その他も11.6%あり、「根拠が伝えられなかった」、「まとめて報告できなかった」などの理由であった。

5) 指導者から適切と評価を受けた内容

演習全体を通して、指導者から適切と評価を受けた内容について、自由記載で意見を求めた。内容を分析した結果、29名が指導者から適切だと評価された内容があり、『技術に関すること』と『アセスメントに関すること』に分類された。

(1) 技術に関すること

技術に関することでは、「バイタルサイン測定の手技・測定方法」や「患者役への声かけ」などの基本技術に関することや、「寝衣交換の方法手順」といった生活援助技術に関する内容が適切であったと評価されていた。また、「離床時の安全」、「創部の観察」、「術後の観察法」などの患者の状況に応じた技術も適切と評価されていた。最も適切と評価された内容は、基本技術である「バイタルサイン測定の手技・測定方法」であった。

(2) アセスメントに関すること

アセスメントに関することでは、「観察項目」や「報告内容」、「呼吸のアセスメント」、「根拠が言えた」、「予測したことが言えた」などであり、患者の状況を適切に理解し、根拠をもって報告できたと評価された学生もいた。

6) 演習を通して今後の課題になったことは何か

今回の演習を通して今後の課題となったことは何かに

ついて、自由記載で意見を求めた。内容を分析した結果、『技術に関すること』と『アセスメントに関すること』に分類された。

(1) 技術に関すること

技術に関することでは、「観察の手順方法（一連の流れ）」といったフィジカルイグザミネーション、つまり正しい手技で確認することに課題を感じていた。また、患者への説明がうまくできず患者の協力を得られなかった学生もおり、状況に応じた説明の仕方や離床の方法、さらには患者の安全安楽のための工夫が課題と感じていた。

(2) アセスメントに関すること

アセスメントに関することで多くの学生が課題として感じていることは、「観察後、アセスメントして報告すること」であった。その他、「セルフケアの状態を考えたながら離床に繋げること」や「援助や観察項目の根拠を押さえること」を課題として感じている学生も多かった。いずれにしても、患者の今の状態を判断し、必要なケアを正しく判断することを課題と認識している学生が多かった。また、「事前学習不足」や「病態生理の知識不足」など、患者の状態を判断するための基盤となる知識が不足していることが課題と認識している学生も多かった。

7) 演習全体を振り返っての感想

アンケートの最後に、演習全体を振り返っての感想を自由記載してもらった。記述内容を分析した結果、「実習への動機づけ」「学習への動機づけ」「演習の手応え」「今後の課題」の4カテゴリーに分類された。(表3)

(1) 実習への動機づけ

実習への動機づけは6内容あった。「実習前の練習になりすぎく役だった」や「患者の立場に立つこと、気を付けることなど病院の看護師の指導だからこそ実習で実施できる」、「成人の実習に活かせると思った」など、本演習から約1週間後からはじまる成人看護学実習Iに対する動機づけがされていた。

(2) 学習への動機づけ

学習への動機づけは7内容あり、「これからも、報告までやる演習をしたい」や「理解不足が多く、もっと勉強しなくてはと思った」など、本演習が今後の学習への動機づけとなっていた。「また、臨床のやり方を教えてもらったため勉強になった」や「アドバイスをたくさんもらった」、「指導者に多く教えてもらった」、「+aで教えてくれてとても勉強になった」など、学習への手がかりとなるような学びもあった。

表3 演習全体を振り返っての感想（学生）

カテゴリー	内容
実習への動機づけ	<p>実習前の練習になりすぎ役だった。 成人の実習に活かせると思った。 患者の立場に立つこと、気を付けることなど病院の看護師の指導だからこそ、実習で実施できる。 病院の状況が聞けて実習に活かそうと思った。 実際行うことでイメージがついた。</p>
学習への動機づけ	<p>これからも、報告までやる演習をしたい。 理解不足が多く、もっと勉強しなくてはと思った。 イメージトレーニングが必要と思った。 +αで教えてくれてとても勉強になった。 臨床のやり方を教えてもらったため勉強になった。 アドバイスをたくさんもらった。 指導者に多く教えてもらった。</p>
演習の手応え	<p>事前にアセスメントした患者さんを想定して演習することで、アドバイスや注意を受けながら実施できたので自分のものになった。 実習のような学びができた。 以前の演習では実施できないことができた。 とても濃い演習だった。 すぐくためになる演習だった。 学びがとても多かった。 いろいろ覚えることが多かった。 教員のアドバイスもあり、しっかり学習できた。 とてもわかりやすかった。 細かくみてくれ、先生にもすぐ質問できた。 疑問が解決できて本当によかった。</p>
今後の課題	<p>援助の目的、エビデンスなど知識不足を感じた。 事前学習や事例をよく読み込むことが大切だった。 自分に何が不足していたか改めて確認できた。</p>
その他	<p>準備に時間がかかり、もったいないと思った。</p>

(3) 演習の手応え

演習の手応えでは12内容あり、「実習のような学びができた」や「以前の演習では実施できないことができた」、「事前にアセスメントした患者さんを想定して演習することで、アドバイスや注意を受けながら実施できたので自分のものになった」など、急性期の看護過程の展開事例と連動していることで、より手ごたえを感じていた。

(4) 今後の課題

課題は3内容あり、「援助の目的、エビデンスなど知識不足」や「自分に何が不足していたか改めて確認できた」、「事前学習や事例をよく読み込むことが大切だった」などであった。最も多くの学生が認識した課題は「知識不足」であった。

3. 指導者のアンケート結果

1) 学生の演習状況から指導が必要だった技術

演習終了後に、「学生の演習状況から指導が必要だった技術」について、複数選択式で回答を求めた。「呼吸音、腸蠕動音などのフィジカルアセスメント」、「一般状態等観察の方法」、「寝衣交換の手順（健側、患側）方法」の3項目について6名中4名の指導者が、指導が必要だ

たと回答した。「腹腔内ドレーンなどの胃切術後に特有な観察方法」と「離床時の安全確認」の2項目については、3名の指導者が指導が必要だったと回答したが、「バイタルサイン測定」については指導が必要と回答した指導者はいなかった。その他、「患者への説明と同意」に指導を要したと3名の指導者が回答した。

2) 指導を通して気づいたこと

演習全体を通して気づいたことについて、自由記載で意見を求めた。記述内容を分析した結果、「学生の強み」「学生の弱み」「演習の効果」「演習の課題」「指導者として新たな気づき」の5カテゴリーに分類された。（表4）

(1) 学生の強み

学生の強みに関して3内容あり、「バイタルサインの指導は必要なかった」や「しっかり観察できていた」ということから、フィジカルイグザミネーションや基本技術が身につけていることが学生の強みと認識されていた。また、「学生間で意見やアイデアを出し合っていてよかった」、「時間が足りない部分もあったがグループで協力してアドバイスなどができていた」など、グループダイナミックスも強みと認識されていた。

表4 演習全体を通して気づいたこと（指導者）

カテゴリ	内容
学生の強み	学生間で意見やアイデアを出し合っていてよかった。 しっかり観察ができていた。 時間が足りない部分もあったがグループで協力してアドバイスなどができていた。
学生の弱み	患者のどこを観察すればよいか何故観察するのか、アセスメントの力が足りない。 バイタルサイン測定は何故するのか必要なのか考えて行えるとよいと思った。 寝衣交換や早期離床は何故必要なのか理解して患者に説明できるとよいと思った。 バイタルサインの測定に結び付けていない。 合併症の理解を深める。
演習の効果	患者役看護師役割気持ちが実感できたと思う。 今回の演習は実習に活かせると思う。 バイタルサインと寝衣交換が全員できてよかった。
演習の課題	ケアプランを具体的に立てるとどこをみればよいかわかると思う。 事例と演習をもう少し結びつけるといいと思う。 臨床の実際の場面を説明してあげると実習のイメージがつくと思う。 着替えに時間を要するので、次の学生が着替えておくスムーズにいく、時間を有効に使える。 学生間友達感覚なので緊張感をもっていくとよりよい演習になる。 患者の条件設定など皆で確認する時間があるとスムーズに進む。 当日の流れが学生もよくわかっていなかった。 戸惑っていた。 あっという間に終わったので、もう少し時間があるとうれしいです。
指導者としての新たな気づき	バイタルサインの指導は必要なかった。 病棟実習と違い集中した指導ができた。 緊張感をもって演習に取り組み好感がもてた。 学生がどんなことを考え演習を行っているか確認できた。 今後も連携教育が継続すると良い。

(2) 学生の弱み

学生の弱みに関して5内容あった。「患者のどこを観察すればよいか何故観察するのか、アセスメントの力が足りない」や「バイタルサイン測定は何故するのか必要なのか考えて行えるとよいと思った」、「バイタルサインの測定に結び付けていない」など、根拠を示せない点が弱みとして明らかとなった。

(3) 演習の効果

演習の効果に関する3内容あり、「今回の演習は実習に活かせると思う」や「患者役看護師役の気持ちが実感できたと思う」などがあげられた。

(4) 演習の課題

演習の課題に関する意見は9内容で最も多かった。「事例と演習をもう少し結びつけるといいと思う」や「臨床の実際の場面を説明してあげると実習のイメージがつくと思う」、「患者の条件設定など皆で確認する時間があるとスムーズに進む」、「当日の流れが学生もよくわかっていなかった」など、演習内容や演習のオリエンテーション不足に関する内容もあった。

(5) 指導者としての新たな気づき

指導者としての気づきは5内容あり、「学生がどんなことを考え演習を行っているか確認できた」、「緊張感を

もって演習に取り組み好感がもてた」があげられた。

IV 考察

今年度4回目を迎えるY病院との成人看護学演習授業参観の取り組みを、学生の教育効果に視点を置いて調査・分析した。

第1報（第1回授業参観演習）では90分授業であったが、指導者からの意見も取り入れ180分に増やして演習を展開した。180分の演習構成は、はじめの90分は受け持ちの模擬患者の観察を確実に実施し、そして、その結果をアセスメントして報告することに重点に置いた。それを踏まえて、後半の90分間で術後1日目患者の観察し、離床の有無を判断し報告する。その後、ケア計画を実施し、実施したことをアセスメントして報告するという一連の流れとした。

今回、指導者への報告場面を設定した事から、指導者とのコミュニケーションが増え、そのプロセスの中での学びが拡大した事が推測される。

1. 演習目標到達状況

演習目標は、術後の早期離床の目的と留意点がわかり安全・安楽な援助ができるとし、行動目標として次の4つをあげて学生・教員・指導者に事前に説明して実施した。また、学生の達成度を可能な限り客観的に評価し指導ができるよう各チェックリストを用いた。

- 1) 術後1日目の術後合併症がわかり患者のバイタルサインその他一般状態を観察し、離床への援助の可否をアセスメントできる。
- 2) 輸液ライン、ドレーン類が挿入されている患者の寝衣交換が実施できる。
- 3) バイタルサイン・一般状態の異常がなく、創痛をコントロールできていることを確認後、患者の離床・移動への準備ができる。
- 4) 早期離床の目的を患者に説明を行い、同意を得て安全・安楽に留意した援助ができる。

以上の演習到達目標の達成状況を、アンケート結果から概観すると、指導者から、実施内容や判断が適切と評価を受けた学生は、71名中26名36.6%であった。具体的には、術後の観察に関するバイタルサイン8名、胃切除後1日目の患者の特有の観察項目8名合計16名が観察に関する事であった。その他として、患者役への声かけや寝衣交換、離床の援助などがあげられた。評価を受けた学生26名は、指導を受けながら達成できたと推測できる。指導者アンケートからも、4名中3名がバイタルサイン測定の指導は必要なかった、しっかりできていた、しかし、その他はほとんど指導が必要だったと回答している。指導者が必要と考え学生に指導した内容は、学生が指導を受けたと回答した内容(表2)と一致しており、バイタルサイン測定以外の項目は指導を受けて到達できたと考える。

演習の展開は、術後の観察・報告90分、「寝衣交換」、「離床への援助」の内1つ実施・報告を90分で展開したため、バイタルサイン測定を含む観察の評価が高い傾向であった。これは、第1回報告と異なる結果であるが、今回は観察と報告に90分時間を使えたため、思考の整理ができたためと推測できる。また、今回、チェックリストを用いて評価するシステムとした為、指導者及び教員の指導の視点のずれが少ないことも高い評価結果に繋がったのではないかと考える。

演習に使用したチェックリストは、「バイタルサイン測定」、「フジカルアセスメント」の2つは、基礎看護学の演習で使用したもの、「術後1日目の観察」、「離床への援助」、「寝衣交換」の3つは演習目標に沿った内容で成人領域教員が作成したものである。チェックリストは、各指導者及び教員の指導の視点を合わせるために作成したものであるため、今後検討が必要である。

今後の課題として、術後1日目の観察項目と合併症が繋がらない学生やバイタル測定の原因根拠などの理解不足などアセスメントに関連した学習不足があげられた。本演習は、急性期における看護実践能力の修得の一環として①講義②演習③実習の連携した教育方法の2段階目に位置づけられており、特に重要演習と考えている。①②③の連動や教員間の連携、学生が自ら学習をするよう

な動機づけをすることで学習不足が解消できることを期待する。

しかし、急性期看護学領域のシミュレーション教育として、模擬患者を看護過程展開の事例患者とし、アセスメントの思考過程を継続して演習に繋げるようにした。また、可能な限り臨床に近い環境に整え、模擬患者からの反応、観察やケアの実施後の報告を体験した。学生は、自らの状況判断について指導を受けたことで術後看護に必要な知識、思考、行動のステップを振り返る事により「早期離床の目的と留意点がわかり安全・安楽な援助ができる」という演習目的に到達できていることがわかった。

2. 成人看護学演習と臨床指導者授業参観による教育効果

今回の演習は、成人看護学における周手術期看護演習として前述の目標の下に、事例患者の状況に応じた判断力や看護実践能力の基礎を養うことを目的に実施した。周手術期看護は、手術による侵襲が大きく苦痛を伴う患者に対して、合併症を予防し順調な回復過程をたどるための観察やケアが重要となる。学生は、演習を経験したとしても実習では、実際の患者と演習での患者の違いに戸惑うことが予測される。そのため、看護過程演習において事例展開をした患者を設定条件とし、術後患者により近い状況に患者役を装備した。

中村の報告にあるように、英国の看護系大学の成人看護学演習の現状報告によると、臨床実践能力向上には、看護基礎教育においても臨床状況に近い設定で演習を構築する必要があると明記している⁴⁾。

本演習は、主たる実習病院の臨床指導者が参加したため、さらに臨床に近い環境で演習をすることができた。また、患者役には、閉鎖型吸引ドレナージシステムや点滴等は臨床での器材を使用したため指導者の経験と知識を十分発揮した指導ができた。学生は、授業での器材の見学と説明を受けているため、模擬患者と指導者からの指導で知識と実践が繋がったと考える。

Y病院との連携教育の目的の1つは、指導者が学生のレディネスを把握して臨地実習指導に繋げることである。学生は、実習において手術侵襲を受けた術後患者を受け持つこともある。生活力やコミュニケーション能力が乏しい学生にとっては、実際の患者と学内で学習した患者との違いに戸惑い緊張がさらに増してくる場面が見られる。今回は、模擬患者役の学生に、術後の一般的な状態(発熱、痰喀出困難、創痛)等を記載したカードを事前に手渡し、可能な限り演じるよう協力を依頼した。また、閉鎖型吸引ドレナージシステム、弾性ストッキング、末梢静脈内点滴等を装着し、臨床の術後患者に近い状態を設定して実施した。

学生の演習全体をとおしての感想は、表3に示すよう

に4つのカテゴリーに分けられた。その中で①実習前の練習になりすぎた役だった②成人の実習に活かせると思った③病院の状況が聞けて実習に活かそうと思った等「実習への動機づけ」や④これからも報告までの演習をしたい⑤理解不足が多くもっと勉強しなくてはと思ったなど今後の「学習への動機づけ」となっていた。また、①演習でいろいろ覚えることが多かった。②患者の立場に立つこと、気を付けることなど病院の看護師の指導だからこそ、実習で実施できる。④とても濃い演習だった ⑤すごいためになる演習だったなど「演習の手ごたえ」があった。逆に実習が不安になったという学生もいた。不安は不快な体験であるが、軽度中等度の不安はこれが誘因となって、問題解決や学習に取り組みやすくなると言われている。学生は自分の知識不足などを実感できたからこそ不安を感じたが、この事は学習への動機づけなることが予測できる。

日本赤十字広島看護大学の講義・演習・実習を「つなぐ」教育よると、学内演習に模擬患者や臨床看護師の協力による看護教育サポーター制度を設け学生の看護実践力育成に効果があることが報告されている。この演習でも、技術実施だけではなくケア提供前の観察、アセスメントをしており、学生はその観察・判断結果と援助後の患者の状態について看護師に報告している。また、看護技術の実施や観察したことを看護師への報告・記録の体験を通して対象者への看護援助を担う医療チームの一員としての責任や自覚をもち、行動できることを期待していることを明記している⁵⁾。

本演習は、1週間後に控えた成人看護学実習Ⅰの実習前OSCE（臨床客観的能力試験）の位置づけではないが、それに近い方法も一部含まれている。臨床現場で必要とされている臨床実践能力を育成し現場との乖離をなくすためには、指導者の授業参観など臨床現場により近い演習環境をつくることに加え、実習前OSCEも視野に置いて演習方法を改善していく必要がある。今回、指導者4名から多くの演習に関する課題を提案して頂いた。今後の演習に活かして、基礎教育と臨床をつなぐ教育を目指していきたい。

まとめ

今回は、成人看護学実習Ⅰ前に実施した指導者の授業参観による教育効果に視点をあて分析をしたところ、次のような教育効果が確認できた。

- 1) 主たる実習病院指導者の授業参観や模擬患者の設定など臨床に近い演習環境を設定し、術後の観察や報告に重点を置いて演習を進めたところ、演習目的はほぼ達成した。特に重点をおいた術後観察は、指導者の評価も高かった。
- 2) 学生は、演習で実施したことが自分のものになった

ことや疑問が解決したなど演習の手ごたえを感じる事ができた。

- 3) 学生は、実習前の練習になりすぎた役だった実習に活かせると感じており実習への動機づけとともに、理解不足が多くもっと勉強しなくてはなど今後の学習への動機づけとなった。
- 4) 指導者は、臨地実習では見ることが少ない学内における学生の強みを実感し、学生の理解に繋がった。

おわりに

今回は、初回演習の時間数を90分から180分に増やし、術後1日目患者の看護として、早期離床を目的に、術後の観察とアセスメントに重点を置いた。時間数が増加することで、丁寧な指導ができたこと、学生の思考する時間があつたことで、初回報告と比較すると具体的な教育効果が見いだせたと考えている。演習目標達成の他、学生や指導者の多くの気づきがあり実習や日々の学習への確かな動機づけなっていることがわかった。

今後、基礎教育において、学生が、社会のニーズにあつた看護実践能力を養うためには、臨床に近い演習環境など効果的な教育方法を再検討していく必要がある。其のためには、主たる実習病院との連携は欠かせない。改めて、今後も連携教育を推進していくことの必要性を再認識した。

また、連携教育による教育効果や演習目標の達成度を測定するために、客観的な指標を検討し質の評価に繋げていく必要がある。

しかし、今回、アンケートに演習担当者の区分を示さなかったことから、臨床指導者と教員の相違点、役割分担等について明確にすることができなかつた。今後、研究方法を見直し教育効果を明確にしていく事が課題である。

多忙な看護業務の中、指導者を本学に派遣、また臨地実習への理解と協力を継続して頂いているY病院の看護部長はじめ師長、指導者の皆様に深謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容に関する検討報告書、9、(2011)
- 2) 神奈川県：神奈川県における看護教育のありかた・最終報告書、10、(2012)
- 3) 藤澤なお子：自治体の立場から見たユニフケーションシステムの概要と今後の展開、看護教育、55 (11)、1018-1019、(2014)
- 4) 中村裕美：英国Plymouth University の看護基礎教育における成人看護学演習の現状、日本赤十字豊田看護大学紀要10 (1)、183-187、(2015)
- 5) 川西美佐・山本加奈子・吉田和美：看護実践力を育

むために講義・演習・実習を「つなぐ」教育、看護教育、55 (3)、248-254、(2014)

- 6) 松本由恵・鈴木香苗・植田喜久子・中信利恵子・岡田淳子・池田奈未:看護実践力を育むために“考える”“わかる”“できる”をめざす教育、看護教育、55 (4)、348-353、(2014)
- 7) 大川宣容:講義—演習—実習のつながりのなかで行うシミュレーション教育—急性期看護学領域での取り組み—、看護教育、54 (5)、368-373、(2013)
- 8) 杉森みど里・舟島なをみ:看護教育学 (第5版増補版)、555p、医学書院、東京、(2014)
- 9) 平井純子他:基礎教育と実習施設との連携教育による教育効果 (第1報) 神奈川歯科大学短期大学部紀要第1号 65-69 (2014)

著者への連絡先:平井純子 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL: 046-822-8766

E-mail: hirai@kdu.ac.jp